

東直樹先生の「相手に伝わる答案づくり ～表現力の育成をめざして～」について

愛知教育大学 青山和裕

東先生は生徒が根拠や着想を意識しながら相手に伝わるように書くことができるような指導に取り組まれていた。多様な他者と協働して取り組むことも求められる社会であるので、自身の意思決定とその根拠をきちんと表現できることは大事であり、東先生の実践はそれに対して数学科なりにアプローチした実践であるといえる。指導の成果として事後テストでは根拠を書くことができるようになっていたことから一定の成果が出ていたことが窺えました。

東先生が今後さらに活動を広げていくにあたってこちらから提案ですが、扱う題材について教科書や問題集に掲載されている定型の問題ではなく、正解が定まっていないような問題を扱ってくれるといいなと思いました。根拠をいつでも書くのというのは時間もかかって大変ですし、受験等の別の場面ではそこまで求められなかったりすると、生徒にとって使い分けが難しく感じてしまうかもしれません。その点、正解が定まっていない問題では、自分の結論が安易に認めてもらえるわけではないですし、他の人と違う結論に至っているかもしれません。そのようなときには、自身の結論の妥当性や根拠をきちんと相手に伝えなければ同意を得ることはできません。必然的に根拠を明確にしたり表現力を発揮することが求められます。例えばコロナ給付金の金額はいくらが妥当か、というのは重い話題かもしれませんが、もっと高校生に身近な話題でも使えるものはあると思います。今後も継続して取り組んでいただければと思います。